

DCDLinkシリーズ I

仮面ライダーエグゼイド
なガシャット

What's game?

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダーエグゼイド／宝生永夢はレベル5の力、ドラゴナイトハンターZガシャットを手に入れ、バグスターウイルス感染者を順調に救っていきながらあと数週間で小児科研修が終了と言うところまでできた。そんな中、謎のガシャットによるゲームエリアが広がったのを確認した。ガシャットの元まで近づいてみるとそこには黒いコートで身を包み、黒い剣を持った青年と、白を基調とし赤のポイントが入った服を着てレイピアを持った少女を見つけた。明らかに怪しい二人に対して永夢は…

仮面ライダーブレイブ／鏡飛彩は聖都大学附属病院に向かう途中、偶然バグスターウイルスに感染した一人の青年に出会う。彼が感染したウイルスのバグスターはなんと10本のガシャットはおろかこの世界にはないゲームのものだった。そんな正体不明なバグスターと戦っている中、突如妖精のような容姿をした謎の少女が空から現れる。そして謎のバグスターに感染したこの青年は…

仮面ライダースナイプ／花家大我は仮面ライダーレーザー／九条貴利矢にとある公園に呼び出される。そこに行くとスナイパーライフルを構えた少女が仮面ライダーレーザーと戦っていた。不思議な光景の中でレーザーに助けを求められる大我、しかし、彼が気になったのはもう一つ。レーザーの持つみたことのないガシャットだった。そのガシャットが偶然大我の元まで飛ばされると謎の少女はライフルの銃口を大我に向け…

三つの物語がつながったとき、はじまりの理由が明かされ、新たなゲームが始まる。

目次

0	こ目のなぞ 何が始まるの？	
0	バーチャルをRealに？	1
	1つ目のなぞ 君は誰？	
1-1	広がるのはunknown field	3
1-2	つながるdouble world	7
1-3	新たなガシヤットはdeath game？	14
1-4	白紙のガシヤット buleに染まる	18

0こ目のなぞ 何が始まるの？
0. バーチャルをRealに？

??? 「始まる、ついに始まるんだわっ!! 究極のゲームがつ!!」

2026年1月3日、東京都新宿区、とあるビルの中、そんな声が響いた部屋には人間は一人しかいない。では一体誰と話しているのか？その答えははいたって単純で、しかしあり得ないものだった。

??? 「そうだ、これであと少しだ。あと少しでお前の望みはかなう。」
そう言ったのは人型であるにもかかわらず、狐のような姿をしており、それは怪物と呼べるものだった。怪物はそう言いながら最初の言葉の主の背後から近づく。声の主は多くの砂をおとしながら手に同じ形で違う色の何かを3つ持ちそのまま高笑いをし続ける。

??? 「おい、いつまで笑ってるんだ。まだやることはあるだろ」

??? 「そうね、あともう少しなんだから。」

そう言いながら、持っていた3つのものを机に置きわ会うのをこらえながら、そばに置いた椅子に腰を掛ける。同時に謎の音楽が部屋中に響く。よく聞くとそれは電車が駅に進入するときなどに流れるものにていた…。

仮面ライダーエグゼイド／宝生永夢はレベル5の力、ドラゴナイトハンターZガシャットを手に入れ、バグスターウイルス感染者を順調に救っていきながらあと数週間で小児科研修が終了と言うところまできた。

一方仮面ライダーブレイブ／鏡飛彩は自分の恋人の仇でもあったグラフィイトバグスターを倒し、心に少しの隙間が生まれながらも外科医としての仕事を真つ当していく。

また仮面ライダースナイプ／花家大我は宿敵であるグラフィイトバグスターを倒し勢いに乗っており、このまますべてのガシャットを手に入れる方法を考えている。

一方、仮面ライダーレーザー／九条貴利矢は黒いエグゼイドの正体が檀黎斗であることを知ったため、彼の言われるがままにわからないことを調べていく。

エグゼイドの世界は、四人の仮面ライダーがゲームデータのバグによって発生した新種のウイルス、バグスターウイルスの感染によっておこる病気、通称ゲーム病を治療しながらバグスターの真実や人の思考にたどりついていく物語。

そんな世界に、いなかったはずの人間が現れる。それが引き起こすのはその世界にあるはずのないゲームがガシヤットとなって現れ仮面ライダーたちが新たな出会いを果たす、小さな物語。この物語は彼らが心の中にしまうことでかかわったもの以外の人には知られることのなかった。

しかし意味をなさない物語などない。なら、この物語を知っておくことは悪いことではないのかもしれない。

では、まずは仮面ライダーエグゼイドと白と黒、二人の剣士との出会いを見ていこう。

1つ目のなぞ 君は誰？

1-1. 広がるのは unknown field

「まずい、まずいまずい。一刻も早く調べなきゃ！」

そういいながら細い道を走るのは少し小さめのバッグををもって黄色のシャツに赤いズボンを着た青年。しかしそれ以上に気になる特徴があった。一つは右の鼻の穴にティッシュをつめていうこと、もう一つはバッグと一緒に白衣を持っているということ。

「誰かが近くでバグスターと戦ってるのかも。」

白衣を持つている人など医者か科学者ぐらいなものだが、戦うなどという言葉を放つのは不自然である。しかしこの不自然なことを解消する言動は今から約5分前に終わっていた。

「最近ゲーム病の感染者も少ないなー」

そう語るのは5分後に細い道を歩く青年だ。ゲーム病とはバグスターウイルス感染症とはゲームのバグによって発生した新型ウイルス。感染経路は不明だが、感染者はバグスターという怪物を生み出し体が消滅してしまう恐ろしい病気である。しかしその病気の存在を知っているものは数少ない。ゲーム病の発生にかかわったもの、ゲーム病による被害を防ごうとする衛生省の一部の人間、ゲーム病の治療を行える唯一の医療機関である電脳救命センター、通称CRの人間、そしてCRのドクターにゲーム病と診断された人間、さらにさまざま方法でゲーム病について知ったものなどがある。

「まあ僕も小児科研修があるし、ゲーム病の患者が少ないのはいいことだけどね。」

そう言つて4分後に走る道とは打って変わって大通りで歩く青年は小児科研修という言葉を放ったので医者である。そしてゲーム病の存在を知るため、CRの人間の可能性が高くなった。

「飛彩さんも昨日はオペがあったって言ってたから忙しい時に来ないのはありがたいけど。」

飛彩とは地下にC Rの病棟がある聖都大学附属病院の院長の息子でもあり天才外科医でもある鏡飛彩のことである。彼はC Rでゲーム病の患者を治療する医師でもあるので彼のことが出てくるあたり、C Rの関係者であるのは確定的だ。し

かし、新型ウイルスに対抗する機関に研修医がかかわれるかは疑問である。3分後に細い道に入るとは思えない道筋を歩いている彼だがその方角は聖都大学附属病院であるため、小児科研修の先はそこだと思われる。

「そういえば最近天気がいいのに気温が低いなって・・・ああつ、時間がっ！とにかく急がなきゃ。遅刻だー！」

そう、彼の家の時計は止まっており、家電量販店のショーケースのテレビ、気温について気になったのでちょうど天気を表示を見てみると時間が出発時間から1時間以上たっており、家から10分しかたっていないだったので急ぎだったのである。まわりの人にぶつからないようにはしているものの、その速さはさすがに危ないものであった。最も2分後のほうがもつと速く走っているがそれでももうすぐ曲がる角に差し掛かるときに・・・

「うわーっ！ちよつと、なんでー」

彼は落ちていた空き缶を踏んでバランスを失い、前に倒れそうになった、角から青年が現れもう少しでぶつかるところでもあった。

「どつ、どいてー！」

と叫ぶと青年は紙一重にかわし、彼は盛大に

こけた。そして彼が持っていた荷物の一部も一つは聖都大学附属病院の名札である。今更だが彼の名前は宝生永夢、予想の通り聖都大学附属病院で小児科研修医として勤務している。二つ目は白衣、特にこれには何も無い。三つ目四つ目が不思議なのである。

「おいおまえ、大丈夫か？ん、なんだこれ。」

青年はマゼンタカラーのトイカメラを首に下げていること以外は、特に変わった様子のない普通の人だった。彼が拾ったのは、黄緑色の素体にピンクのレバー何かを指すスロットにGCのマークがしるされた、ベルトのバックルのようなものだった。もう一つは基盤がむき

出しになっており、ピンクの素体が手に握りやすい形をしていて、MIGHTY ACTION Xのロゴとゲームキャラがプリントされたラベルが張られている、ゲームソフトのようなものだったのだ。

「うっ、うーん。あれ？ここは。」

「気が付いたか。鼻血出てるぞ」

「あれ、ほんとだ。ティッシュティッシュ。」

「ほらよ」

「あ、ありがとう。あくそうか、転んで。大丈夫でしたか。」

「それはこっちのセリフだ。急いでるなら早く落としたのを拾えよ、ほら。」

「ありがとうございます！えーつと、これとこれと… うんこれだけかな。ほんとすいませんでした。」

「いいから早く行けよ。急いでるんだろ。」

「はい、ありがとうございます。じゃあ。」

そう言つてエムは再び走り出すと、青年はつぶやいた。

「なるほど、大体わかった。」

そして彼はそのまままっすぐ歩きだした。

「ああっ、遅刻確定だけど急がなきゃー。」

一方エムは病院に向けてまた走っていた。先ほどよりも遅いが、やはり急ぎ目である。

しかし、突如彼は不思議な感覚にとらわれた。彼自身が今まで何度も感じたものに近いが、しかし今までのものとは違うそれは、地面がお店が、木が、一瞬ブロックのような形状に変化し、元に戻っていく。この波がどこかを中心に広がっていった。

「これはーまさかー！」

そういうと、エムは進路を病院から波のように広がる空間の中心に変え、走り出す。

そして、彼が細い道を走る5分前から今に至る。エムはまだ走って

いたが幸いにも人が少なく、全速力で走っても問題なかった。そしてあと少しで中心につく。彼は走りながらさつき落としていたベルトのバックルのようなものと、ゲームソフトのようなものを手に構えた。そしてついにはたどり着くとそこには…

黒いコートに身を包み、背中に黒い剣を携えた少年と、白い服にアーマーをつけて、腰にレイピアを携えた少女、が並んで立っており、周りを見渡していた。そして少年はエムの持っているゲームソフトのようなものと同じ形で基盤の部分や素体の色、ラベルが全く番うものを握っていた。色は水色、ラベルにはSword Art Onlineのロゴと卵のような形の城のようなものが描かれていた。

そうすべての始まりはそのゲームソフトから、これは二人の剣士と一人のドクターとのあるはずのない出会いであり、これから始まるあ
るはずのなかったゲームの始まりでもあった。

1—2. つながるdouble world

細い道で研修医の宝生永夢が見つけた二人の二人の剣士と一つのゲームカセット。どうやら謎の空間の中心はゲームソフトのようだが永夢も同じ形のものを持っている。この二つ、この謎の空間を広げるところを含めてただのゲームカセットではないことはわかる。

「君は、だれ？」

永夢はカセットのほうではなく、彼らの素性が気になったようだ。当たり前だがこのような姿がこの町で流行っているということではなく、どう考えても怪しいのだ。

「その前にまず教えてくれ、ここはどこだ？」

そんな質問現実で、しかも道の真ん中ではしないのでなおさら怪しい。しかし本気で困っているようなのでとりあえず大体の住所を教えただが、二人ともおかしなことを言いだした。

「それは、それは本当か!？」

「だってまだクリアどころか第100層まで到達してないのに!？」

「まさかバグなのか? いや、にしてもこれはあり得ない。」

「でもそうとしか言えないじゃない! 私たちが、現実世界に戻ってこられるわけないんだから。」

と、さらに怪しさが増す二人だが、そんな二人に突如謎の怪物が後ろから襲ってきた。

「後ろっ。」

とつさに叫ぶ永夢だが怪物の持つ剣の歯は振り下ろしかけており、振り返った後では回避は不可能であった。しかし、彼らは振り返りもせず、回避しようともせず、背中と腰の剣を抜き、怪物の剣をうけとめた。その状況は怪しいを通り越して、理解不能だった。特別ガタイがいいわけでもない二人の少年少女が、自分よりも一回りも二回りも大きく筋肉質な体を持つトカゲのような怪物の大きな一振りを受けてめるその光景は、永夢の口を開けたまま閉じさせなかった。

「こいつ、強すぎだろ。」

「いやそれを受ける君もすごいけど!」

「そんなことよりどうするの。どういう状況かわからなかったらどうしようもないじゃない。」

確かに。実際、怪物と謎の剣士二人が戦うなんて理解不能だ。普通なら怪物に恐怖し、逃げてしまうことだが、今の永夢は二人の少年少女が怪物に襲われるのを黙ってみているだけなどでできなかつた。

「おい、きみ。とりあえずそいつを倒せばいいんだな。」

「ああ、でもこいつレベルが高いからそんな簡単には…。」

「だからあなたは逃げて！何とかして私たちで倒すから。」

「大丈夫、俺が今助けるから。」

「なに！」

「どういうこと！」

そう、彼は戦える。戦う力を持っている。右手に持っているのは戦う力を内包した「ガシヤット」と呼ばれるもの、左手に持っているのはその力をつかうための「ゲーマドライバー」というベルト。これらを使えばあの怪物に攻撃を与えられるかもしれない。そう思った瞬間、彼はベルトのバックルをお腹にあて、ゲーマドライバーを装着した。そして彼は右手のガシヤットをグリップ部分で回しながら頭の高さまで持ってきた。そして回転を止めたと同時にスイッチをおし、ガシヤットの機能を起動させる。

「マイティアクションX！」

と軽快な音楽と同時に発せられたこのセリフ。さらに少年が持っていたガシヤットと同じくゲームエリアと呼ばれる空間が広がった。そして永夢の背後にはゲームのスタート画面、さらにそこから板チョコを2×2×2マスの正方形に組み立てたような箱が出てきた。その箱は狭い道の空中に、はたまた地面に配置される。そしてすべてが終わると永夢は一瞬にやけ、ガシヤットを顔の向かって右から水平に大きく振って左に。同時にかがみながら左手もガシヤットの前にまで一緒に運び、

「変身！」

と叫ぶ。すぐに体勢に戻しガシヤットは上下逆さに左手に持ち変える。そして左手を突き上げそのままガシヤットの基盤をドライ

バーのスロットに差し込む。

「ガシャット！ レッツゲーム！ メツチャゲーム！ ムツチャゲーム！ ワツチャネーム!？」

永夢の周りにゲームキャラクターの顔が永夢を中心にいくつか回り、エムの前で一つの顔が止まり、それを右手で押すと、エムの姿は顔がゲームキャラのものに似ており、ピンクの髪の毛が逆立っているような頭に、ゴーグルにゲームキャラの目を付けたような「目をした3頭身の厚い装甲をまとった。

「アイム ア カメンライダー!」

そう、この姿こそが新型ウイルス、バグスターウイルスの脅威から人類を守るため、ゲームの力を使うヒーロー、仮面ライダーなのである。そして永夢が変身したのはアクションゲーム「マイティアクションX」の力を使う、仮面ライダーエグゼイド、そのレベルである。「なんだありや!？」

「いったい何がどうなってるの?」

二人の剣士は永夢の姿が変わったことに驚きを隠せなかった。しかしその反応を受けながらも永夢は、

「俺は仮面ライダーエグゼイド、ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!」

と自己紹介と決め台詞を言った。そして右手に大きいハンマーの武器「ガシャコンブレイカー」を召喚し怪物に向かって走り出した。

「おおお、おいちよつと。」

「ぶつかるー!」

と叫ぶがエグゼイドは剣士たちのすぐ近くで大ジャンプをし怪物たちを飛び越える。

「すげー」

「あの体型で!？」

と驚く二人をよそに、ガシャコンブレイカーで怪人を横から殴るエグゼイド。すると怪人は大きくのけぞり壁に強く当たった。

「大丈夫だったか、そういえばまだお前らの名前を聞いてなかったな。」

「いやそうだけど、まあいいか。俺はキリト。一応通じるかわからんがソロだ。」

「私はアスナ、血盟騎士団副団長よ。」

「ソロ？血盟騎士団？よくわかんねーけどちよっと手伝ってくれ。あいつたぶん強いからな。」

「口調が変わった？まあいいわ、協力はするけど、あとであなたのことちゃんと教えなさいよね。」

「あとは俺の持つてる子のゲームカセットみたいなもんとかのこともな。」

「よっし。それならこっちも、大変身!!」

そういうとエグゼイドはドライバー正面のレバーを開く。

「ガツチャーン！ レベルアップ！ マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティマイティアクションX！」

と軽快なリズムの音楽とともに厚い装甲をジャンプしながら脱ぎ、背中にレベル1の顔が付き頭はレベル1の顔をマスクぐらいのサイズに縮まったようなものボディはピンク、黒の縦ラインに足や手の甲などに銀の装甲をつけ、両肩にピンクのアーマー、胸にはレベル1にもあった体力ゲージや武器のアイコン、4つのカラフルなボタンが装飾されたアーマーで、ようやくしつかりと人型になった。レベルアップによって能力の向上などがされた仮面ライダーエグゼイド アクションゲーマーレベル2である。

「あ、ちゃんと普通なものもあるのね。」

「まあ普通ではないけどな。」

「とにかく行くぜ、よっし。」

「ジャ・キーン！」

ガシャコンブレイカーを剣モードに変え、2人から3人の剣士となった。その間にも怪物は何とか立ち上がるも、剣を大きく振り回してるので、さっきのダメージは少なかつたのだろう。

「よし、頼むぜ、剣士さんたちよ。」

「任せろ。」

「行くわよ。」

3人はあつたばかりとは思えないほど息がぴったりだった。

「そーれっ」

初めに切りかかったのはエグゼイド。怪物が迫ってくるのすれ違いざまに切り付け振り向いて背中も二回斬る。そしてそのまま剣士二人もお腹を切り付けるが、そこで減速、こんどは正面から押そうとするがキリトが左から右に振り回し、怪物は大きく吹っ飛ぶ。

「大丈夫かアスナ。」

「ええ、あのモンスター、妙にタフね。」

「でもやっぱり行動が単純だ。ならここはソードスキルを使つていこう。」

「わかったわ、えーつと、えぐぜいどさん？あなたなにか必殺技的なのないの？あつたらいつでも出せるようにしといてね。」

「おう。」

「ガツシユーン！」

「ふっふっ、よっと。」

彼は癖でカセットに息をける。

「ガシャット！」

ドライバーのベルトの左の腰の部分にある決め技スロットに、マイティアクシオンXを指しこむ。

「せいっ。」

「やー。」

その間にもキリトたちは怪物の攻撃をかわしながら少しずつ攻撃を当てていた。そして必殺技の準備が完了したエグゼイドは、彼らが怪物を後ろに押し出したすきに、後ろからブロックをたたきながらジャンプし怪物の元に着地、3つたいたブロックのうち最後に一つにはライダーを強化したりする「エナジーアイテム」の一つ、パワーを上げるものが入っており、それがエグゼイドに入り込んだ。

「マッスル化！」

そしてそのままエグゼイドは怪物を奥に切りつけ、

「お前らも早く。」

と叫んだ。

「わかった！」

「任せて！」

そう言ってアスナは剣を構えながら、走り出した。すると剣は青白く光りだし、エグゼイドを通り過ぎながら、怪物に目掛けきれいな6回攻撃、6連撃のソードスキルを食らわらせる。

しかしタフなため、これではすぐに攻撃されてしまう。しかし、「スイッチー！」

とアスナが叫ぶと、遅れて走り出したキリトが連続して今度は紫っぽく光り、きれいに8連撃のソードスキルを決める。ソードスキルは剣を振って当てるよりも安定して強い力で攻撃するので、ダメージは相当でかい。これで押し切る。それが狙いだったが、どうやらわずかに足らず、怪物もソードスキルを使おうとする。至近距離のスキルを使い終わった瞬間ではかわすのは困難だった。

「キメワザ！」

そこにエグゼイドが現れる、準備をしていた必殺技を起動したのだ。

「マイティクリティカルストライク！」

怪物に向かって飛び蹴りを放ち、そのまま空中で連続蹴りそして最後に踏ん張って奥にけりだす。

「会心の一発！」

運がいいのかどうやら相手の弱点にうまく決まったようだった。怪物はそのまま奥に飛びながら結晶が砕け散るように消えた。つまりあの怪物に彼らは買ったのだ。彼らはあつたばかりにして、ここまですの合ったコンビネーションができたのだ。

「おっしゃー、クリアだぜ。」

「ありがとう、エグゼイドさん。最後はひやひやしたけど。」

「そういうえば、俺たちの攻撃方法どうしてわかったんだ？何も伝えてなかったのに。」あのタイミングで強い攻撃を出すときは、たいてい押し切るってこと、ゲーマーなら常識だぜ。

そういうと彼はドライバーのレバーを閉じ、ガシヤットを取り出した。すると彼のエグゼイドへの変身が解除され、普通の姿となった。

「そういえばまだ名前を言ってなかったね。僕の名前は宝生永夢、小児科研修医でゲーマーなんだ。」

彼らがお互いののを知った。いや知ってしまった。これでもう後戻りはできない。

そう、世界は機械仕掛けでできている。交わろうとすれば壊れてしまう。たったこれだけの時間で壊れてしまう世界を修復する方法は……、神のみぞ知るといふことだろう。

1-3. 新たなガシャットはdeath game?

キリト、アスナ、そして永夢。三人は悩んでいた。

「さて何からどうやって話そう。」

お互い共闘したとは言え他人であることに変わりはない。さらにわからないことが増えたので、どう説明すればいいのかがわからなくなってきたのだ。方や高校生のように見えて剣をきれいに振ることができる剣士たち。方や急にスースーパーヒーローに変身する医師。お互い怪しすぎる。

「うちが明かないといけないんで俺から」0。「キリトがそういうと深呼吸をして永夢の顔をしっかりと見た。

「俺たちは実は……。」

「ソードアート・オンラインに閉じ込められたプレイヤーなの。」

ソードアートオンライン、通称SAOはVRMMORPGというジャンルで作られた最新ゲームソフト。仮想現実のAvatarに自分の意識を投下し、武器は剣だけで魔法はなし100層ある浮遊城アイクラッドを第一層から順に攻略していく。初回生産がわずか1万本、各店舗発売後速攻で売り切れ、SAOのサーバーにはVR専用ハード、ナーヴギアを使って意識の投下、フルダイブをしたプレイヤーが続々と現れた。今までにもVR向けのゲームはたくさんあったが、作りこみの良いものはなかった。しかしナーヴギアの開発者が作ったこの作品はやはり今までのものとは段違いだった。プレイヤーも初めての感覚に心を打たれて、すぐには出ようともしなかった。しかし、そうでなくても出られないゲームでもあった。

「ソードアート・オンライン、って何？」

「知らないのか、本当に知らないのか？」

「オンラインゲームは一通りやってるけど、聞いたことがないよ。」

「そんな、4000人も死んでるはずなんだから、知らない人がいない

位二ニュースには……。」

アスナがそう言いながらうつむくと、

「そのゲームに閉じ込められてるってどういうこと?」

「それは……。」

「仮想空間に入り込むゲームだったが制作者の手によってログアウト不能、HPが0になるとハードが脳を焼き切り現実でも死亡するデスゲーム。」

「ちよつと!?!」

こちらもうつむいてしまいながらに言うキリトだが事実である。実際二人もここに来るまでゲーム内にいたはずだった。二人は小声で

「大丈夫、この人は自分をゲーマーといった。ならゲーム業界史上またとない事件を知らないはずがない。と言うことは何かおかしいことになっている、ということだろう。」

「そんなの今でも十分わかるわ。でも、なら言わなくてもよかつたんじゃない……。」

「今のこの状況を正確に知るには少しでも情報を共有しないといけない。わかつてるだろ。」

そういうと、今度はSAOのことを聞いて動揺しているキリトに質問をする。

「どうだ、聞いたことあるか。」

しかし

「そんな大事件が起きてるなんて聞いたこともない、というか仮想空間に入り込む技術はまだどこの企業開発中の段階のはず……。」

「やっぱりそうか。」

永夢の言葉で何かを確信したキリトだったが、アスナにはまだわからなかったらしい。

「やっぱりって、どういうこと!?!」

「ここは少なくとも俺たちのいた現実世界じゃないってことだよ。初めてここに来た時から現実にしてはと思ってたんだけど。おそらく過去かまたは……、宝生さん、今は何年ですか?」

永夢はキリトの話を聞いて驚いたが、すぐに

「えっと、2016年だったはず。」

と答えた。しかし二人の話から少し疑心暗鬼になる。

「2016年って、7年前にタイムスリップしてたってこと？」

「ああ、まだもう一つの可能性もあるけど。そしてたぶん原因はこれだろう。」

そう言ってキリトが取り出したのは例の謎のガシヤット。永夢にはずっとラベルが見えていなかったがキリトがそれを見せると、

「これは!？」

と驚く。ガシヤットは現在20本あり、うち10本は安全なライダーガシヤット、残りはそれ以前に作られたプロトガシヤット。プロトガシヤットもライダーガシヤットも同じ10種類のゲームタイトルだがそれはガシヤットの開発もしている幻夢コーポレーションのゲームだった。初めての例外、そう、キリトの持っていたガシヤットはソードアート・オンラインものだった。

「新しいガシヤット?しかもあるはずのない未来の。」

「これは俺たちがこの場所にいたときに光りながら浮いてた。そしてあたりを見回していると、」

「あなたがやってきた。まあたぶん似てるものを持っているあたりここに来たのはこれのため、なのかな。」

そういわれて永夢はうなずくと、マイティアアクションXのライダーガシヤットを取り出し、

「これはきつスキの仮面ライダーに変身するためのものなんだ。」

「その仮面ライダーって、いったいなん…?」

そういおうとしたときそばにあった永夢のズボンのポケットから形態の着信音のような音がなりだした。

「ちよつと待ってて。」

そう言って携帯を取り出して通話をし始めると

「もしもし明日那さん。どうかしましたか?」

電話の相手はCR関係者の仮野明日那。アスナは一瞬びつくりするも電話の相手の名前だと知り。また何か考え始める。

「そうか、今日は僕休みだった。ああいえなんでも。大変なこと？それがこつちも…、えっ、盗まれた!?データを入れる前のものとデータを入れる装置が？わかりました。すぐ向かいます。それとこつちもおかしなことが起きててそれについても。はい。では。」

そう言つて電話を切り、ポケットにしまうと。

「どうかしたの?」

「ごめん、なんかほかにもトラブルがあつて病院の方いかないといけないんだ。僕のこととかはその病院で話すよ。ちよつと一緒に来てもらえない?」

「私たちは構わないけど、ねえキリト君?」

その呼びかけにキリトはすぐには応じず周りを見渡していた。まるでその様子に納得がいかないかのよう。

「キリト君?キリト君!」

「えっ、おう悪い悪い、んでなんだっけ。」

「ちゃんと宝生さんの話聞いてた?病院に行かなきゃいけないから、ついてきてくれつて。」

「ああ、大丈夫俺は構わないよ。」

そういうと、永夢は散らかつていたバッグを整理し、

「ならよかつた。ここからなら5分ぐらいでつくから、いそごう。」

そう言つて走り出した。アスナやキリトもそつて走り出す。ずつといた道を曲がるギリギリで後ろにいたアスナは奥のほうで、黒髪の一部がまとまつて白くなつたような髪色に白衣を着た人が走つているのが見えたが、何も気にせず行く

事件がいつも一件ずつなんて保証はない。同じ人間が複数の事件にかかわりにくい以上、同時に起きたも事件を結ぶのは難しくなる。彼らの知らないところで、もしかしたら…。

1-4. 白紙のガシヤット b u l e に染まる

CRでは現在緊急会議が行われていた。

二階の会議室ではライダーシステムの製作者、檀黎斗や衛生省から派遣されたCRの看護師、仮野明日那、テレビ画面越しには衛生省の大臣官房審議官日向恭太郎が会議に参加していた。あとはこの病院の院長である、鏡灰馬がいるが彼は現在放心状態である。人数が少ないがかかわっている人間が元々多くないので重要な人間はそろっているのだ。

「永夢は呼ぶことができませんでした。しかし大我や貴利矢は連絡が…」

明日那は部屋の中のテーブルの固定電話の受話器を戻し二人にそう告げると黎斗は、

「彼らは独自に行動してるのでこちらに来ることはないでしょう。しかしこの問題を一人だけで対処させるのは難しいかもしれません。」
「確かにそうだがこのような事態では何らかの対処を急がなくてはならない。衛生省としてもこの事態は予想していなかった。幸いにも大きな事態になっていないので彼が来たらすぐに状況を把握してもらい行動にあたってお貰おう。」

日向恭太郎はCRの設立させ、バグスターウイルスに関する事態を收拾しようとしているが、何か重大な問題が起きた際、CRに直接命令を下すことがある。今回もその重大な問題が起きたのだ。

「それが実は永夢もなにかトラブルに巻き込まれたようで、もしかしたら今回のことで何かもうかかわっているかもしれない。」

明日那が電話の内容を伝えるとまたしても黎斗が、

「すごいな。鏡先生といい彼といい早くも何かをつかんでいるのか。」
と反応してきた。実際鏡飛彩は今回の召集前に今回の事態に巻き込まれていた。その事態をもとに現状を整理されているが、どうやらまだわかっていないことが多く、事態の收拾が優先されているようだ
「鏡飛彩は現在は何を？」

「例の少女と患者を連れて郊外へ。どうやら彼はクリア条件を見つけましたようです。ただ患者は途中で単独行動に走ったようで現在どこに

いるかは。」

「そうか。肉体的に安定しているとはいえ感染しているならば安静しているべきだが。戦いに巻き込まれてないのならば現状は攻略が最優先のほうがいいのか。」

「今はその場の判断に任せましょう。彼も事態の收拾を優先しているはずです。」

やはり事件は1つだけではないようだ。しかも根っこの部分ではつながっており、それはとても壮大な出来事なのかもしれない。

そしてついに到着したのは
「遅くなつてすいません。いろいろあつて、なるべく急いだんですが。」

謎の少年少女を連れて白衣姿で息切れを起こした宝生永夢だった。謎の少年少女、キリトとアスナは先ほどの戦闘服から普通の服になっており、見ただけでは特に不思議なことはない。

「大丈夫、休みだったのこの時間ならむしろ早いほうよ。そっちの二人つてもしかして君の言っていたおかしなことに関係してるの?」「そうなんです。とりあえず僕たちに色々関係ありそうなので来てもらったんですが。」

「やはり君もか!」
急な叫び声に思わずその場の全員が驚き声の主に視線が集中する。もちろん叫んだのは黎斗だ。

「つまりその二人はガシャットによって生み出されたバグスターで、未来のVRゲームのプレイ中にこのバグスターの体に接続されたんだろう。」

「黎斗さん、なんでそんなことを!?!」

この場所までの会話で三人が話し合つて結論付けたことを当てられ動揺する3人を

「永夢、とにかく座つて。たぶんあなたたちのかわっていることは今の事態の一部のかもしれないわ。」

といい言い明日那は椅子に座らせた。

「あのっ。」

「どうしたの。」

「宝生先生にこの事は聞いてます。今のこの状況は皆さんにとっても異常なのはわかります。でも、でも私たちは今の自分たちの周りに起きていることをどこまで信じていいかわかりません。」

「よせつ、アスナ！」

当然だ。デスゲームにとらわれたプレイヤーが今度はあり得ない現実に直面した。覚めない夢の中で覚めるかどうかかわからない夢を見ている、キリトもそんな感覚に陥っていた。

「だって、私たちはあのデスゲームにとらわれて、現実に戻ってこれるはずがなかったのよ！形はどうあれ、私たちは逃げ出してしまった。その罪悪感に押しつぶされそうなのよ！」

「アスナち着け！」

周りは騒然としていた。彼らは今回の事態の收拾についてののみを考えた。二人のような存在がかかわってくる予想はしていた。しかしその存在にどんな思いがあるか、彼らは考えられなかった。

「すまない、君たちがこのだれで、どうしてこうなったのかは私たちにも全部はわからない。これまでどうだったかも聞いてはいけない、私たちは君たちが来る前にそういう結論に至った。だから私たちは君たちのことを理解してあげられない。」

日向が画面越しにそう言い放った。

「そうですか。」

「君たちも今回の事件の被害者だ。想定外の出来事とは言え私の作ったシステムが引き起こしてしまった。責任をもって君たちをもとのゲームに戻そう。」

「黎斗さん……」

「ありがとうございます。俺たちも少しこの状況に整理が付き切れてません。話しにくいこともあるのでそういつたことなら助かります。なっ、アスナ。」

「……ええ。そうね。私も早とちりが過ぎました。まだ全く話を進めないままに」

悲しい目をしていたアスナも何かを吹っ切ったようにまっすぐと

キリトを見ていた。

「よかった。今回の出来事については情報共有するべきだと思うわ。だからまず自己紹介しましょう。」

「そうですね。明日那さん。僕はもうここに来るまでにしたのであとは皆さんで。」

「では私から。衛生省大臣官房審議官の日向恭太郎だ。今回のことは私が指揮を執ることになった。以後よろしく。」

「衛生省、ですか。」

「どうやら衛生省という単語にキリトやアスナは引つ掛かりを持つたようだが、そのまま自己紹介は檀黎斗へ。」

「次は私が、幻夢コーポレーション社長、檀黎斗だ。君たちがどこまで把握しているかわからないが、さつき話した通り、私がガシャットの製作者で今回の事件を開発者として解決案を出している。」

「私は仮野明日那、このCRで看護師をしているわ。それからあそこにいるのがこの病院の院長。ちよつと事情があつて今ああなっているけど、とりあえず紹介しておくね。」

何気においてある音ゲーのアーケード筐体の前で椅子に座って上を向きながらボーとしている灰馬をさらつと紹介たところでCRのメンバーが自己紹介をし終わり、キリトたちも自己紹介をする。

「じゃあ俺たちも。俺はキリトって言います。本名はあるんですけど、状況が状況なんでニツクネームお願いします。」

「私はアスナです。仮野さんと同じ名前ですけどこれが私のニツクネームなんで。」

「じゃあ自己紹介もすんだことだし、私たちが編み出した解決法を説明しようか。」

謎のガシャット、稼働中のゲーム、デスゲームから締め出された少年少女。

この事件が生むのは果たして絶望だけなのか。